

難民ネイルで自立へ

ネイルを学び、自活を目指す難民たち(左)。ボランティア相手に技術を磨く—東京都新宿区の難民支援協会に



日本で暮らす難民にネイル技術を教え、自立の手助けをしようとの試みがはじまった。不況のおおりの受け職を失う難民もいる中、新しい形の支援に期待が高まっている。

【木村葉子、写真も】

4月初旬、東京都新宿区の難民支援協会に難民たちが集まり、接客やネイル施術の練習が始まった。客役のボランティアの手をマツサージュしながら「気持ちいいですか？」と笑顔で声をかける。

難民

人種、宗教、政治的意見などを理由に迫害される恐れがあり、母国から逃れた人。日本は81年に難民条約に加入し、本人の申請を受け法相が認定する。法務省によると、09年の申請者は1388人で、認定者は30人、特別に在留を認められた人は501人。申請者の国籍は47カ国で、ミャンマー(568人)、スリランカ(234人)、トルコ(94人)が多かった。日本は「難民鎖国」との非難を受け、今年から3年間、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)が認定したタイのキャンプにいるミャンマー難民の定住も受け入れる。

講習受け今月、店頭に「仕事が楽しい」

岩瀬香奈子さん(35)は企業コンサルタントなどの仕事をしているが、知人の話で在日難民に多くいるので、ここに笑い声が響くのは珍しい」と話す。ネイル施術を教える

店舗リストラで、昨年9月に失職した。飲食店で働く夫(43)の収入だけでは家賃や光熱費、食費を払うのが精いっぱい、体調を崩しても通院を我慢しがちという。別のミャンマー人女性(46)は「仕事は楽しく、お客さんにも喜んでもらえる」と、やりがいを見いだしたようだ。

在日難民の生活支援をしてきた同協会の鹿島部長は「難民が得られるのは3K仕事ばかり。職がなく孤立する人も多いなか、他者とコミュニケーションを図りながら生き生きと働けることは喜ばしい」と歓迎。岩瀬さんは「厳しい生活を強いられている人の自活の道が開ければ」と、愛弟子たちの巣立ちを楽しみに待つ。

*

民の生活が苦しいことを知った。「何かできないか」と考えているうちに、収益率が高く安定収入を得やすいネイル施術を思いついた。早速、岩瀬さん自身でネイルスクールに通って技術を学び、東京都内にネイルサビズ会社「アルーシャ」を設立。今年2月から難民らに教え始めた。みな75時間の講習を終え、既に接客できるレベルに達している。母国で美容師として働いていた女性(44)は「技術を磨き、早く自立できるようにしたい」と話す。18年前にミャンマーから来日。15年間働いた居酒屋の

難民たちは今月から港区海岸1のアルーシャで働く予定だ。既に予約も受け付けている。施術料は一般より安くしており、オープンキャンペーンとしてクリアデザインコースが3150円で受けられる。詳細や予約はホームページ(http://arusha.co.jp/nai)で。

毎日新聞 2010年5月9日(日)